APRU Undergraduate Summer Program 2009 参加報告書

法学部第3類(政治コース)3年

Rising to the Challenge ~Global Leadership in the 21st Century~をテーマに、シンガポール国立大学にて 7月 12日~7月 25日に開かれた第 4回 APRU 学生サマープログラムに参加して学んだことを報告する。

以下、時系列的にプログラムを概観する。

Monday, July 13

- -Welcome speech and NUS overview
- -Welcome tea
- -Program Orientation
- -Singapore City tour/campus tour
- -Welcome Dinner



初日には、これから2週間にわたって私たちのタイムマネージメントをしてくれる、プログラムコーディネーターによるオリエンテーションの後、シンガポール観光をした。リトルインディア、アラブストリート、チャイナタウンを巡り、水上タクシーでのクルージングも行い、シンガポールが人種的にも文化的にもいかに多様性に富んだ社会であるかを知ることができた。夜、University Hall でのディナーでは、副学長もいらっしゃり私たちのこれからの素晴らしい2週間を激励していただいた。

参加メンバーは総勢 50人で、出身校は、日本からは東京大学のほかに大阪大学、東北大学、京都大学、中国からは北京大学、南京大学、浙江大学、清華大学、復旦大学、台湾から台湾大学、韓国からコレア大学、ソウル大学、オーストラリアからオーストラリア国立大学、シドニー大学、メルボルン大学、ニュージーランドからオークランド大学、地元シンガポールからもシンガポール国立大学、アメリカからオレゴン大学、UCLA、南カリフォルニア大学、チリからチリ国立大学があがり、それぞれの大学から基本各 2 名が参加した。他大学生のこのプログラムに対する意気込みも高く、自分の大学の代表として「選ばれた」という意識を皆持っていた。例えばオレゴン大学の学生は応募者が 30人程度もいた中から面接で選出されたようである。このような現状と、私が 2 週間のプログラムで学んだ「今後のリーダーが世界規模でものを考えることの不可避性」を鑑みるに、東京大学でもこのサマープログラムに関する一層の広報活動の必要性を感じ、また国際社会に広く目を向ける、将来の日本ないし世界のリーダーたりうる学生の Intensive な養成は本学教育における重要課題の一つであり、今後東大がアジアの no1 として世界の中でも発言力を保ち、一層の発展を遂げるためにも必要不可欠であると切実に感じた。東大におけるプログラム参加希望者が少ない障壁のひとつに、プログラムの日程が学部の夏学期試験と被ってしまっているという問題があり、解決策としてプログラム参加者への試験欠席時の特別措置なども考える必要があると感じた。

本学における英語教育の一層の充実の必要性は、私自身がプログラム中に英語によるコミュニケーシ

ョンの難しさに直面したことからも身をもって感じている。ネイティブのカジュアルな会話の速度が思ったよりも早く、留学経験もない私には想像以上にタフであった。

Tuesday, July 14 Theme: Ethics of leadership

- -Ethics of Leadership-Religious Leadership in a Diverse Society
- -Visit to National Museum of Singapore
- -The Challenge of Ethical Leadership

2日目は、Ethics of Leadership をテーマに講義を受けた。ところで、このプログラムを通じて感心したのが、毎日講義にテーマが掲げられていて一貫性を持っている点など、プログラム全体がかなり上手く構成されていることである。この日から4日間毎晩行ったプレゼンターによるワークショップ型の講義などもその例で、継続的な講義を通じてリーダーシップについて深く考えさせるようできていた。また、各講義の終わりには質疑応答の時間が30分以上は確保されており、双方向性も確保されており大変刺激的だった。講義だけにとどまらず、博物館やナイトサファリや研究施設見学などのフィールドワークも充実しており、また networking tea や lunch など、学生同士の交流を深める時間も随所に盛り込まれていた。ここまで完成したプログラムを企画したシンガポール国立大学の国際交流室には本当に頭が



下がると同時に、もし今後東大でこのようなプログラムが開催される機会があるとするならば、ぜひ今回のプログラムと同様か、それ以上の質の高いプログラムを用意してほしいと思った。地下資源に恵まれないシンガポールは人材やhospitalityで勝負しようという意識が非常に強く、教育や観光政策などの点で、同様に資源に乏しい日本も見習うべき点が多い。

午後はシンガガポール国立博物館を訪れ、 シンガポールの歴史や文化を学ぶことができ た。

Wednesday, July 15 Theme: Leaderhip, Science, and Technology

- -Global Leadership-the information Technology imperative
- -Singapore: Biomedical Hub of Asia
- -visit to Night Safari

3日目は、IT 社会におけるリーダーシップをテーマに講義を受けた。3人の講師によるリレー講義で、インドネシアの講師はウェブカメラによってモニターで講義を行った。C-generation(コンピューター世代)



である私たちのリーダーシップは、より一層周囲の環境に常時接続的であり、対話の場が常に設けられ うる。そうした「開かれた、情報共有的な」リーダーがこれからのグローバルリーダー像であることを 学んだ。

午後は、シンガポール政府が重点的に支援する複合集中研究施設 biopolice の遺伝子に関する研究施設を 訪れ、資源の少ないシンガポールの効率的な知的生産政策の在り方をみた。

夜はナイトサファリに行き、多くの動物を間近に見ることができた。外国人観光客の多さから、シンガポールにおける観光政策の一つとしてのナイトサファリについて考えさせられた。

Thursday, July 16 Theme: Leadership and Social Entrepreneurship

- -Social Entrepreneurship in the Singapore Context
- -Social Entrepreneurship and Leadership
- -workshop: Facilitation Skills for Leadership

4日目は社会企業家を招いて講義を受けた。社会企業家は、社会的弱者の救済という社会正義の実現と同時に収益性を求めるビジネスモデルであり、とくに World toilet organization 代表は、官僚制の行き過ぎの弊害についての話が興味深く、自らの今後の夢の話からも、社会企業家の魅力が伝わってきた。社会的リーダーは社会的弱者の救済などの問題にも真剣に取り組んでいかなければならないという、当たり前ではあるがなかなか実感を持てないことを、社会企業家というその第一線にいる人物から学ぶことができた。

この日の夜から始まったワークショップでは、グループに 分かれて架空のケーススタディについてのグループディス



カッションを行い、発表した。そこでは、リーダーは時には究極の決断を為さなければならない状況に 直面するということや、そうした時に「倫理的な」リーダーシップをとることがいかに難しいか、を考 えさせられた。

Friday, July 17 Theme: Leadership and Leading teams -Leading Teams session

この日は1日を通じてワークショップを含んだ講義を受けた。まず前半では「偉大な」リーダーにとって何が必要かのレクチャーがあり、「効果的なリーダーシップ」が、集団内の個の考え、習慣を変え、よりよい未来の可能性を導くものであることや、集団を率いるリーダーシップの行使にはま



ず、自分自身の根源的な欲求を自らが理解していなければならないことを学んだ。また MBTI という自

己分析テストにより統計した自らの性格の傾向を利用したワークショップでは、人間の考え方はいかに人それぞれ異なるかを知り、タイプの異なる他者といかにコミュニケーションするべきかを体験的に考えさせられた。またグループディスカッションにおいて自分がいかにふるまっているかをビデオ撮影し、チームにおける個々人の役割を認識し、効果的なチームが単なる個の集合ではなく、それ以上のパフォーマンスを発揮することを学んだ。この日のような、リーダーシップについて丸1日をかけた intensive な授業は、私も今まで経験したことがなく、ぜひまた受けてみたいと思った。こういった機会を提供する場が、日本の大学にももっとあってもいいのではないかと思う。

Saturday, July 18

- -Approach to Silat 1
- -Optional visit to Plau Ubin

土日は講義がなく、朝の時間は両日とも Silat という 伝統的格闘技に触れた。 Silat は、合気道と似ているが、より戦闘的な競技で、土曜日にまず型や受け身を学んでから、日曜日にキックやパンチを練習した。 シンガポール国立大学で Silat を学ぶ学生に指導してもらい、彼らとの交流にもつながり意義深かった。 昼からは Plau Ubin という離島まで皆で行き、そこでサイクリングやマングローブ林でのウォーキングをし、シンガポールの豊かな自然を満喫した。





Sunday, July 19
-Approach to Silat 2



日曜日は朝の Silat の後のスケジュールが未定だったので、友達と一緒に Orchard Road や Centosa に行き、ショッピングや観光を楽しんだ。プログラム当初から buddy としてともに行動していたシンガポール国立大学の学生とはとても親しくなり、この日も彼と一緒にランチを食べたり、彼の実家に行ったりした。彼は 10 月から東大 AIKOM の交換留学生として日本に来ることが決まっており、彼とは日本やシンガポールの文化や、両国の内情など様々なこと(多くは、たわいもなく、くだらないことだっ

たが)をプレゼンターの部屋で話したりして、今では私の親友となった。今度彼が日本に来る時には、

シンガポールで彼にしてもらったこと以上に彼をもてなしたい、と考えている。

Monday, July 20 Theme: Leadership and Effective Governance

- -Is Good Aid Governance Achievable
- -Future of Governance and Leadership Post-Financial Crisis
- -Workshop: Facilitation Skills for Leadership

プログラムを折り返したこの日は、「効果的で効率的なガバナンス支援はどのように達成されるか」という講義で、インドネシアアチェでの大地震の後の復旧支援を例として、政府、NGO,個人が、効果的な支援を定量的・定質的にいかになしうるかを考えた。グループワークにおいて、私たちの班は「復旧対策における効果的な意思決定のあり方」について考え、発表した。各班ともレベルの高い発表がなされ、改めてプログラム参加メンバーの世界情勢に対する意識の高さに刺激を受けた。というのもこれまで私自身、国内のことばかり目を向けており、アチェ大地震のような海外事情やそれに対する対策などは今までかなり無関心であったからである。このことは私以外の東大生にもかなりの部分あてはまる傾向だと思う。ある時、参加メンバーの一人に、東大はレベルが高く、アジアで no1 と言えるだろうが、他国の大学生に比べて内向き志向ではないか、ということを言われたが、これは正しい指摘だと思う。東大ないし日本の学生は国内で充足してしまっており、海外に出ていこうという気概が他国に比べてあまりない。これは一つには教育にも原因がある気がする。東大に戻ると、このプログラムでの講義のような、worldwide であり大きな夢を学生に持たせる、というような講義は少ない気がする。私がこのプログラムを通じて学んだことの一つに、「若い時に大きな夢を持つことの大切さ」があるのだが、そういった、学生に大きな夢を持たせるような教育をぜひ東大でも行ってほしい、と思った。

続いて、Future of Governance and Leadership Post-Financial Crisis という講義では、corporate governance など、会社法における組織を主に焦点とあてた専門的な話であった。今日、morale やintegrity、transparency が組織やそのリーダーにますます重要となってきていることなどを聞き、この点に関して、私の大学でのゼミのテーマである「明治国家の形成期におけるリーダーシップの取られ方」を比較してみると、明治期における leader と、現在における leader とは morale の部分でかなりの部分異なっており、時代によってリーダーに求められる素質が異なる、ということを感じた。夜のワークショップでは、authority について学ぶもので、自らが rule を作る側に回った時にどう行動するのかを簡単なゲームを通じて体験した。

Tuesday, July 21 Theme: Leadership and Global Health

- -Global Health leadership Challenges
- -Introduction to Gamelan
- -Workshop: Facilitation Skills for Leadership

公衆衛生をテーマに講義を受けたこの日、発展途上国に おける感染症予防の現状や飢餓貧困の撲滅のためには何が



必要かを学び、午後はインドネシアの伝統的な楽器 Gamelan の演奏を体験した。この楽器演奏において、優れた奏者は、自らの音と他者の音を半々に聞くことで、素晴らしいパフォーマンスを行うという。このことは、優れたリーダーにおいても同じことであり、この silent leadership は、自分の考えと他人の考えを半分くらいずつ取り入れる調和型のリーダーシップである。他人との協調性なくしてそれぞれが勝手に音を出しているのでは、オルケストラのようなチームワークは成り立たず、組織としてのパフォーマンスを高めるために、この silent leadership は重要な能力である。また、この日の楽器演奏体験も、参加メンバーとの交流をするいい機会となった。夜のワークショップでは、グループワークとして、自らが国家をつくり、5つのルールを制定するとしたらどういったものにするか、というもので、ロールズの正義論における「無知のベール」が紹介され権力や rule について考える機会となった。

Wednesday July 22 Theme: Challenges to Leadership

- -Faith&Globalization: the challenge to leadership
- -Understand sustainability and dealing with current challenge
- -Visit to Marina Barrage



朝の講義では、Is genuine inter-religious dialogue/action possible in the face of religious fundamentalists in the present?という問いかけの下で、異なる宗教間、特にfundamentalist間の対話の可能性について、社会学の教授の講義によって学んだ。Minority側の対抗の手段として非宗教国家においても出現する原理主義運動では、指導者間の対話は不可能だと考えられがちであるが、シンガポールのような多文化多宗教共存型社会における実践的なテーマとして、inter-dialogueの可能性を提示され、こうしたことは

今後の global leader にとって不可避な解決すべき課題であること、解決する主体はほかでもない私たちであることを痛感した。sustainable development をテーマとしていた 2 つ目の講義では、sustainable development と現在の利害関係者とが調和する仕組みを作ることで、いかにして我々の地球を次世代に残していくかを勉強した。Sustainable development についての勉強の一環として、Marina Barrage というシンガポールのダムの museum を見学し、この国における sustainable development についての取り組みを見学した。

Thursday, July 23 Theme: Effective Leadership

- -The moral bankruptcy of leadership
- -Networking tea
- -Students Aloud session
- -Service Learning and Young leadership
- -Workshop: Facilitation Skills for leadership

講義最終日であったこの日は、まず一企業の代表取締役による、現代におけるリーダーシップの倫理 観の没落についての短い講義を聞いた。彼の話の内容や話ぶりはとても魅力的で、講義が終了してから も彼の周りには人だかりができていた。彼は、「若いうちはできるだけ大きな夢を持つ」という、一見陳 腐で当たり前のようではあるが、なかなか忘れがちで大切な考え方を最も強調していた。

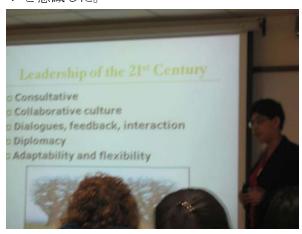
Students aloud session は、メンバー同士が互いのコミュニティでの活動をリンクさせ、より発展さ

せることを目的としており、参加メンバー7名が、各々の所属するコミュニティでの自らのリーダーシップやその活動を紹介した。ある北京大学の学生は、入学試験を1位で通過し、自らの勉強法を本にして出版する他多くの活動をしており、彼女の活動に皆感嘆していた。その他、模擬国連での活動や、目の見えない人を支援するためにNGOとしてインドに行った経験を持つ学生や、自らの考えるリーダーシップについて発表する学生などがおり、非常に刺激を受けた。実は私自身も当初はこの session でプレゼンを



する予定ではあったのだが、なかなか準備が進まずに準備不足で発表を断念してしまったことがとても 悔しい。

この2週間を通じて、私自身今まで日本で持っていた自信をやや喪失した。その主な要因は語学力にあり、もっとスピーキングを勉強しておけばよかった、と痛感した。そうした自信喪失の一方で、私は最初の2,3日こそ他のメンバーとのコミュニケーションが苦痛であったが、積極的な姿勢を見せることで早いうちからメンバーの間にも溶け込み、なかなか人気者になることができた。講義の中でも言われていたが、人間のコミュニケーションは言語的な部分が25パーセント程度に過ぎず、残りはボディーランゲージやアイコンタクトのような非言語的な部分によるらしい。そう考えたときに、私は自分の中の非言語的な部分でのコミュニケーションの重要性を再確認し、その点では自信を持つことができたが、やはり深いレベルでの相互理解のためには言語によるコミュニケーションもさらに鍛えなければならないと意識した。



午後の最終講義は、シンガポール議会の議員を招いてのレクチャーだった。今後の global leader にとって必要な tips を総合的に取り上げたこの講義では、リーダーが持つべき capital を interactive capital, social capital, experiential capital, talent capital の 4 つであるとし、21 世紀のリーダーは、グローバリゼーションと社会の複雑化の中でかつてより多くのことを勘案しなければならないこと、より interactive な力、communicative な力が 試されていることや、まず自分が servant として全体に奉仕するという servant leadership についてな

どをレクチャーされた。特に印象的だったのが"Don't try to be person of importance, become a person of value"という言葉で、まず自分自身が人間として価値を持つことで周りに重要であると認

めてもらうことができるというものであった。

そして夜のグループワークでは、最後に皆で輪になって、この2週間で学んだことを順番に発表し合った。私の発表は以下のようなものであった。

私はこの2週間を通じて3つのことを学んだ。まず一つ目は、コミュニケーションの大切さである。 私は言いたいことが思うようにいえず自分に対していらいらすることがあったりして、将来リーダー として国を引っ張るのならより一層英語を勉強しなければならないことを痛感する2週間だった。自 分の大学にいたら、自分は何でもできるという自信を持っていたが、ここにきて自信を失い、今まで 知らなかった自分の外に広がる世界の広さに気付かされ、自分自身を再構築しなければならない、と いう新たなモチベーションにもつながった。2つ目は、他者を信じること、である。今述べたように自 分自身をうまく表現できず、歯がゆい思いをする一方だった私であったが、そんな私にも他のメンバ ーのみんなはとてもよく接してくれた。私は昔から他人の親切に対して素直に頼ることができないと う面もあるのだが、今メンバーみんなの目を見ていると、そこにはひとかけらの偽善もなく、ただ friendship だけが存在すると確信している。そして3つ目が、大きな夢を持つことの大切さ、である。 このサマープログラムでレクチャーしてくれた講師の方々はみな世界規模でモノを考える人たちばか りで、参加メンバーのみんなも将来世界規模で活躍しようという視野の広い人が多い。講義でも学ん だ、今世界で起きている悲しい現実を見るにつけ、私はいままで国家公務員として日本に奉仕し、日 本のリーダーなることのみを考えていたが、それでは日本にちぢこまっていることになるのではない かという気がしてきた。今日の国家は国際社会との関係なしに論じることは不可能で、我々は常に世 界とつながっている。そう考えると、日本のリーダーとなるという目標は決して小さいものではない が、それでもやはり視野が狭いのではないかと思う。これからは、他のメンバーたちとともに、日本 のリーダーとしてより良い世界をつくるために働きたいと思う。

これら3つのこと(「コミュニケーション」、「他者を信じること」、「大きな夢を持つこと」)を総合すると、私たちAPRUメンバー50人が「より良い世界を築く」という大きな夢を共有し、互いに何の偽善もなく、真の友情から付き合い、互いにコミュニケーションをとり合うことで、本当に世界を変えることができるのではないかと思う。この50人はそれだけの大きなポテンシャルを持っているはずである。私はみんなと一緒に世界を変えたくなってきた。

最後に、buddy になってくれたシンガポール国立大学の学生には本当に感謝している。あなたとbuddy になれて本当に幸せだった。今ではあなたは私のシンガポールの親友と呼べる存在だ。

皆熱心に私の話を聞いてくれた。その時気づいたが、私自身の内面の変化である。2週間前はうまく自分をとりつくろうとして、相手の言っていることが理解できなくても、適当にうなずくだけだったので、コミュニケーションをとるのがつらかったが、今では、相手に何度も聞き返し、たとえ自分の言いたいことがうまく言えなくても、積極的にコミュニケーションしようという気持ちで、trial and error を繰り返す勇気を持つことができるようになったように思う。このことで私は、異なるコミュニティの中でうまく適応するという能力に自信を持てるようになった。

みんなの発表が終わった後、プレゼンターは、2週間が終わって自国に帰ったとしても、現実に戻るのではなく、ここで築いた友情の輪を維持継続して、これからもメンバー同士で連絡し続けることを説いた。講義終了後は、皆教室に残り夜遅くまで写真を撮り合い、改めてここで築かれた友情のかけがえのなさや socializing, network の大切さを実感し、このような wet な人間関係は日本にはなかなかないので

はないかと、大変うらやましく思った。

Friday, July 24

- -Young leader's forum
- -Networking Time
- -Farewell Dinner

最終日は、シンガポールの若手企業家やNGOのリーダーたちを招いてのより双方向的なフォーラムだった。午後は自由時間であり、皆連絡先を交換しあった。それぞれ自国の民族衣装に着替えての夜のclosing dinnerでは、オレゴン大学の学生がヒップホップダンスを披露したり、私たち日本人5人がソーラン節を披露したりして盛り上がった。最後、修了証が手渡され、2週間にわたるプログラムが幕を閉じた。

2週間のプログラムを通じて、講義終了後は皆で一緒に多くの場所に遊びに出かけた。自室で休む暇もあまりないくらい、とても充実して夢のような2週間だ





った。このプログラムで学んだ知識、感じた悔しさや自信や情熱を今後も忘れることなく、自分の大学生活にフィードバックしていきたいと思う。最後に、この参加報告書を通じてこのサマープログラムいかに素晴らしいものかが、本学学生に少しでも伝わり、さらなる参加希望者の増加につながることを願う。



APRU サマープログラムの報告書

所属:工学部電子情報

今回のプログラムのテーマは Global Leadership であった.環太平洋にある国々の大学から,Global Leadership を目指す色々な学生たちが集まって授業を聞いたり意見交換をしたりする.私が今回のプログラムを通じて感じた一番のやりがいは様々な学生たちと話し合い,交流することができたことだ.それぞれ異なる環境で育ち,異なる言語を使用し,異なる勉強をしている.そんな人たちが同じところに集まって Global Leadership という一つのテーマについて話し合うことは私にとっては初めての経験であり,とても楽しかった.そもそも私がこのプログラムに参加した一番大きい理由は新しい挑戦がしたかったからである.私は私が今まで経験したことのないことを挑戦するのが好きだ.それによって自分の能力の限界はどこまでなのかを知りたいのでもあり,もっと高いところを目指すことは自分をアップグレードしてくれるに間違いない.だから私は学生のうちに学生でしかできない色々な経験がしたい.私は今回のプログラムのサブテーマだった Global Health,Social Entrepreneurship,Religious Fundamentalism などについて知識がまったくなかったといっても過言でないが,今回のプログラムに参加してそれらの重要性を感じて,興味をもつようになった.

また、Global Leadership を目指す人にとって必要不可欠なものとして「他人とのコミュニケーション」があると思う。私は今回のプログラムの中で討論をして自分の意見を表現することがどれほど難しいことなのか実感した。一番重要なのは普段色々な分野に関心をもつことではないかと思う。プログラムに参加した学生たちは、専門がそれぞれにもかかわらず、どのテーマに対しても興味をもっており、ある程度の知識をもっていた。もう一つ重要なのは自分の考えを、自分の意見をもっていることだ。討論の時、テーマについて知識はあったがそれに対する自分の意見がはっきりと確立されておらず、意見が出せなかった時がしばしばあった。

今回のプログラムで色々なことを学んで、経験したが、私でもできるという自信感がついてきたことが何よりもうれしい。今回のプログラムで学んだことをいかして、これからも今まで経験していないようなことをたくさん経験して学んでいきたいと思う。

APRU サマープログラム 2010 が私に与えたもの

法学部 第1類私法コース 4年



1. 一緒に参加した仲間たちについて。

APRU は、バラバラで個性的な仲間と出会う場でした。チリから始まって、ぐるりと太平洋を囲んでアメリカ、韓国、日本、中国、台湾、マレーシア、インドネシア、シンガポール、オーストラリア、ニュージーランド…、多様な仲間が1つの場所に2週間集い、学び、議論する。彼らと一緒に同じ時を過ごせたことが、APRU の最大の魅力でした。彼らとの関わりの中で私が学んだことは膨大です:レクチャーやフィールドワークに対する姿勢(あんなに自然に・積極的に発言したり質問したりする人たちを私は見たことがありません)、知識の深さ、1つのレクチャーに対して感じる各自の意見の多様さ、オープンな性格、他者を尊重する姿勢、何事も楽しもうとする意欲、何もかも、いま自分自身に吸収されているのを感じます。

2. シンガポールについて。

シンガポールで開催された今年の APRU は、この国についての視座を私に与えてくれもしました。驚かされたのは、またもその「多様」性です。電車に乗っていると、インド人が乗ってきます。誰も気にも留めません。その隣でマレー人がマレー語で談笑し、さらに隣で私たちが英語でおしゃべりをしています。おそらく、シンガポールを理解する1つの鍵は、この多様性にあるのではないかと感じました。この環境に驚いている私と、この環境で生まれてこのかた育ってきたシンガポール人と、この両者の間には、感覚・皮膚レベルで、多様性に対する大きな姿勢の違いが生まれざるをえないと痛感します。

また、アジアでもあり、西欧化された国でもあるシンガポールで日々を過ごすことで、自分が育った日本という国についても考えざるをえませんでした。例えば、私は「空気を読む」といった閉塞的な日本文化のあり方はあまり好きではありませんが、逆に繊細で細やかな気遣いや感性をもつ日本を誇りにも思います。こうした「自分の中に自然に潜む日本文化」が目に見える形でむき出しにされ、それに自分はどう向き合うのか問われる、そうした貴重な機会を得ることができたのも、このプログラムから引き出せた大きな財産です。

3. 自分自身について。

私にとって APRU は多様性と向き合う場であり、それはすなわち多様性の中に放り込まれた「自分自身を見つめる」場でもありました。たとえば、上述のように、日本文化に私はどう向き合うのか?私は意識的にそれとは違う道を選ぶのか否か?APRU で出会った魅力的でハイレベルな仲間たちと渡り合えるためには、自分はどう変化していけばよいのか?自分の強みは?克服したい弱みは?全ての気づき・発見が、自分へと反映されていることに、今改めて気づかされます。

そして、気づきが自分に反映されるということは、APRU は2週間で終了してしまう単なるプログラムでは決してなく、むしろ今後の私自身に大きな影響を与える重大な出来事であったということです。出会った仲間たちとのつながりも、これで終わってしまうわけではなく、これからも続いていきます(既に今 facebook 上では参加者の『I miss you all~~』の嵐ですし、もっと長い視点で、きっと将来この APRU で出会った仲間たちと一緒にビジネスを立ち上げたり、なにか面白いことをスタートさせたりするチャンスがやってくる予感がします)。

このような素晴らしい機会を提供してくださった全ての人々に感謝せずにはいられません。そして今後もこのプログラムが続いていき、たくさんの学生が私と同じように刺激と驚きに満ちた経験にめぐり合えることを願ってやみません。

APRU2010 報告書

教養学部地域文化研究学科3年

1. APRU2010 プログラム内容



シンガポールから帰国して 2 日が経ちました。シンガポールを離れて東京に戻っても蒸し暑さは変わらないのですが、2週間過ごした友人たちが周りにいないことに違和感と寂しさを感じます。彼らはそれぞれの国に帰り、新たなスタートを切ろうとしています。私も新たなスタートを切る前に、今回参加した APRU を振り返ってみたいと思います。

APRU2010では、シンガポール国立大学(NUS)に12カ国から49名が集まりました。今回のテーマはRising to New Challenges - Impactful Leadership in the 21st centuryということで、昼間の活動は様々な分野のリーダーの講義、シンガポールが誇る施設訪問、ワークショップでのディスカッションなど。また観光も充実していて、シンガポールを思いっきり楽しみました!写真だけ見せたら「遊びにいったの?」と言われてしまいそうですが…。特に欧米の友人たちは「勉強するときは勉強する、遊ぶときは遊ぶ」と割り切っていたので、私もそれに倣ってメリハリがつけられました。APRUで最も魅力的だったのはプログラム最後のコンペティションです。賞金が出るので皆目の色を変えて励んでいました。私たちのチームの提案は香港の教育システムを日本に導入するというプランです。私のつたない英語のせいで意思疎通ができずに険悪ムードになったときもありましたが、国を超えたチームメイトと一から練ったプランを発表した経験はかけがえのないものです。コンペティション直前には明け方まで遊んだ後に朝からミーティングを行うなど、なんだかんだ楽しみつつ、けれども真剣に取り組みました。私のチームは入賞できず本当に悔しかったですが、ほかのチームのアイディアやプレゼンには素直に感動し、多くを学び取ることができました。今後APRUに参加する方はぜひコンペティションに挑戦してみてください。最後のFarewell Dinnerはそれぞれが民族衣装に身を包んで華やかなも

のとなりました。日本人学生は十数年前の懐かしのパラパラを披露して、これがなかなか受けたようです。

2. APRUで得たこと



「APRU の一番の魅力は?」と聞かれたら、私は間違いなくこう答えます。「友人」であると。APRU2010 では日中韓・ASEAN・オセアニア・アメリカ・南米から実に50人近くが集まりました。こんなにすてきな機会がそうあるでしょうか。彼らはとても優秀かつ魅力的な人間で、彼らとの出会いは私を大きく変えたといっても過言ではありません。お互いの国の政治・経済について議論をしたり、ワールドカップの決勝を見たり、クラブに行ったり・・など、この2週間の思い出をあげたら数えきれません。彼らとは帰国後も Facebook や Skype で連絡を取っていますが、機会があれば会いにいきたいです。また忘れてはならないのが NUS の素晴らしいポスピタリティーです。国際交流課のスタッフをはじめ、NUS側はとても温かく私たちを迎えてくれました。スタッフのサポートがあったからこそ、これほど APRU を楽しめたのだと思います。東大の APRU に対する認知度はかなり低いようで、かくいう私も教務課の掲示を見るまで知らなかったのですが、こんなにすばらしいプログラムはそうそうないと思います。月並みですが、「参加して本当によかった」という言葉がしっくりきます。また同時に私が APRUから持ち帰ったものは「危機感」です。アジアの学生にすら日本は政治的・経済的に存在感のある国ではなく、「日本をどうにかしなければ」という思いがいっそう強くなりました。私自身、もっと積極性を持たなければならないと思います。

以上ほんの一部ですが、APRU の内容を紹介しました。文章ではなかなか伝わりませんが、 要するに私が言いたいのは「APRU は素晴らしい」ということです。ぜひ機会があれば参加し てみてください。